

## 書 評

## 『フィールド情報学入門：自然観察、社会参加、イノベーションのための情報学』

京都大学フィールド情報学研究会 編

- 出版社 共立出版      ○ 発行 2009年3月
- 全ページ 167頁      ○ 価格 3,200円
- ISBN 978-4-320-12234-5

本書はフィールドを、「分析的、工学的アプローチが困難で、統制できず、多様なものが共存並立し、予測できない偶発的な出来事が生起し、常に関与することが求められる場」と定義している。そして、フィールドで生じる諸問題に対して、情報学の視点からその解決のための方法論を、自然観察、社会参加、イノベーションという三つのシナリオを用いて説明している。

具体的に、第1部では自然を観察し予測するための方法論として、リモートセンシング、バイオロギング、システムダイナミクス、第2部では人々の活動を記述し伝達するために、ヒューマンセンシング、エスノグラフィ、ケースライティングが紹介される。そして、第3部では社会と生活にイノベーションを起こすための方法として、インクルーシブデザイン、マルチエージェントシミュレーション、アウトリーチコミュニケーションが取り上げられる。

これらの多岐にわたる方法論は、表面的には個別の項目の列挙になり、フィールド情報学としての体系化の段階には到達していないように見えるかもしれない。しかし、ここに通底するものは、フィールドにおける情報の捉え方にある。本書は、フィールドに内在する情報をそのままのかたちで、欠落することなく扱おうとする点に特徴がある。さらに、複雑な関連性をもつ対象を、単一のまたは統一的なモデルとして説明するのではなく、

種々の価値観、解釈、評価によってさまざまな側面をもつものとして、多元的、重層的にモデル化しようとしている。

このような方向性とその重要性はすぐには理解されにくい可能性がある。従来の研究スタイルと大幅に異なるからである。これまでの科学研究は客観的な真理を探究するものとして成立していたように思われる。これは研究対象を、世界から切り出して固定された境界の中に閉じ込めることによってはじめて可能になったものである。研究室の中で行われる実験や計算機シミュレーションなど、多くの研究がこの形態を採用してきた。そして、このような方法はモノに関する研究においてきわめて有効であった。

しかし、このような方法をそのままの形で人間の生活や社会活動の現場に適用することはできないであろう。むしろ、このような従来型の研究スタイルによって多くの本質的な問題が固定された境界の外側に追いやられてしまうのではないだろうか。環境問題という社会と自然のシームレスな関係に関わる問題や、高齢化社会という世代間コミュニケーションの問題など、いずれも同様であろう。では、このような問題群に対しては、どのように対応すればよいのであろうか？

ここでは固定された境界の内側に成立する客観的な領域だけではなく、その外部も包摂するシームレスな世界に対する把握が不可欠である。そして、本『フィールド情報学入門』の取り組みは、そのような方向へ向けての重要な問題提起であるとともに、その解決に向けた実践のための方法論の提案でもある。その意味では、情報学や社会学を研究する研究者にとどまらず、ビジネスやNPOの関係者、さらには福祉や環境の領域に携わる人々に、本書は広く受け入れられるものと確信する。

このような立場から捉えたとき、本書を越えて、この研究グループが提起する方向性はきわめて重要である。私は、このような取り組みの先見性とその意義を高く評価したいと思う。

(東京工業大学 三宅 美博)